

絶叫
大長を訪問し本家事務所
二階書斎室にて會見

餘人の人夫は作業
するを得ず之等の職工
及人夫は構内隨所に集積を作り本
事務所前等には委員の報告を聞
かん者も二十餘名の群集等々話
めかけ某友愛會員は起つて「要求
の促進」に對し無難を揮ひ群集は
拍手して大に氣勢を揚げた製鐵所
側は更に角長官上京中なるを以て
斯かる重大事に對し確答する能は
ずとの事なるを以て六日午後六時
を期し回答を望む旨を述べ午後一
時過ぎを以て引揚げ群集は一先づ
工場に引あけた

業怠
林立せる煙突も彼に煙
を吐くに過ぎぬ大煙突
煙を初め新煙突の噴り
静めさしめ喧騒を極む
工場も人妻へ聞えなかつた職
工人夫等は工場内に在つて扇
が耳熱して張せる難談をかわ
し或は難談を演説して意氣を
盛り午後六時の交會時間待つたれ目下取調中である

山本農相は愕然と して語る

八幡
製鐵所同業組合の報を藉し
て議院に山本農相を訪問へは
「農相は驚愕措く能
はざる面持にて夫
れは初めて聞くが事實とすれば大
きな問題だから白仁長官
も直ぐ歸らなければ
ばならぬ」本者からも誰れ
か急しなればならぬ、予は何
等事情に接してゐない故に

モ眞實を思へ
ない要するに從
來賃金の値上げ其の他の要求
既としたが夫々其の都度相應に
進んでゐる筈だ、その片側の白仁
長官のみを確め且つ熔鑛
爐の火の滅却につき
製鐵所は如何にすればよいかと問
へば長官も慈悲しつ、確鑛爐
に入れてある火を消さば爐の内面
は丸も割れ釜の様になり將來到底
であらうか

四一大小の煙突が

の氣は夜を壓した六
日も無意業を行つた跡の如く
き鬱鬱を冷たい冬の光線に射して
居る

動出
勢發せる重大事に對し
八幡製鐵所より警備員
五十名を派して警戒し
小倉署より岩橋署長
を以て小倉署に更に入
りて警備員を以て
三十名を引率して第二隊として總
隊に合流した

致引
大群衆の解散と同時に
警備員は中隊を以て
岩橋署長、青村署長、牛田
署長、森田署長、三
名及藤原友愛會長を八幡署に連引
し引續き藤田後次郎、藤澤芳一を
連引し非常演説を囁らんとした
鮮人金業文は應聲罪として引致さ
れ目下取調中である

白仁長官も直ぐ歸らねばならぬ
使用出来ない夫れで復舊には非常
の困難を要すると言明してゐた
(東京)

野村八幡署長
の態度労働者
を怒らす
罷業の報あるや八幡署は構内に非
常警戒を行ひ岩橋小倉署長も警備
隊を以て來援し小倉署長分隊よ
りは中山分隊長以下多數來援して
事務所附近を警戒するに力めたが
幸であつた但し中山分隊長は労働
者代表等との會見中野村八幡署長
は此の場面に會ひ恰も製鐵所の盛
衰を感せずんば試みた事は頗る
事なげせん

誤つて湯氣を
吹出して居る

罷業騒ぎが濟
んだ後の光景
直に風の跡の庭園を想像させ
る昨日まで一切の科學的組織力
のもの、權威を體現させて悉く
の機軸が統一あり、秩序ある活動
を示してゐた大工場は、今マンモ
スの死骸の如く其の機能を失つ
た巨大な姿を横たへてゐる。のた
り閑散業は何故起つたか如何なる
經過を以て成し遂げられたか、そ
んな事を想像する暇はない、たゞ
時代の洗禮は
凄まじい結果
を見せるものだと感心しながら大
庭に通掛つた製鐵の煙突、
を沿つて仕込杖を掲げた、
ら、工場の眞然沿り込んだ。度々
來ても道を覺えないと言つて警備
員は途中で逢ふ來つた業服の労働
者に本事務所への方向を尋ねた。
労働者の姿はチラホラしか見えな
く、多分罷業の本隊が引き掛り去つ
たからであらう。疲つてゐる連中も
勿論工具を捨て、何一つ仕事をし
て居ない

煤煙に汚れた
顔に一種の緊
張した表情を呈せ、
色を揮つて居る。顔は判らぬ
ら吞きさりにササつて居る鮮人勞
働者の二三人も出會つた。消
滅つた煤煙の中からパンを噛む年
らヌツと顔を見せた女人夫もつ
た。構内に七十餘の工場がある
の、其の悉くがジツと無活動
の状態に納まり返つてゐる。煤煙
しを藉して空中を往復する
流りかけた燐ブラ下がつてゐる。
燐がレールの中途に立往生を
してゐる

友愛會
大に活躍す
八幡市通町五丁目における友愛會
八幡市通町五丁目には現在約三千名を有
する友愛會が現存し、
し居るが今同青年會を組織し來る
る、百頭會式を舉行すると同市
内の衛生局、技光會方面の各所に
を新設し大に活動をする。

煤煙に汚れた
顔に一種の緊
張した表情を呈せ、
色を揮つて居る。顔は判らぬ
ら吞きさりにササつて居る鮮人勞
働者の二三人も出會つた。消
滅つた煤煙の中からパンを噛む年
らヌツと顔を見せた女人夫もつ
た。構内に七十餘の工場がある
の、其の悉くがジツと無活動
の状態に納まり返つてゐる。煤煙
しを藉して空中を往復する
流りかけた燐ブラ下がつてゐる。
燐がレールの中途に立往生を
してゐる

誤つて湯氣を
吹出して居る